

# 『葉隠』における個人の問題

中 村 玄二郎

## はじめに

我々日本人は、個人としての自覚が希薄であるといわれている。長い歴史の中で、ゆっくりと時間をかけ、さらに血を血で洗う革命運動という試練を度々経ながら確立されていった西洋人の個人意識に対して、近代になってから思想の形でいきなり輸入された日本人の個人意識は、それによって立つ基盤からして脆弱を免がれないのも、やむをえない事情といえるだろう。

増してや、徳川三百年の幕藩体制をその究極の完成体として、平安末期より起こってきた武士階級の支配による封建制は、主従関係の絶対性、滅私奉公を個々の武士に強要することによって、個人意識の萌芽を不可能なものとしてきたのである。

特に、社会における最上身分としての武士に要請される生き方は、そのまま他の身分の人々にとっても模範とみなされざるをえないものであったから、一般民衆にとっては個人の否定は二重の形をとっていたといえるだろう。つまり、人間として武士を模範とすれば、滅私奉公こそ理想とすべきものであるし、また武士階級に対する存在として考えれば、町人は切り捨て御免でも明らかかなように、個人としての尊厳など全く認められてはいなかったということである。

以上のことを考慮しながら、武士の世界において、個人の存在はどのように考えられていたのかを考察するのであるが、本稿では特に、極端な武士道を説くといわれる『葉隠』を通してこの問題を考えてみたい。何故ならば、『葉隠』は、「武士道とは死ぬことと見付けたり」という有名な言葉によって武士の生き方の究極の姿を規定して、武士の個人としての存在の全き否定を語っているように思われるからである。

## 一

まず最初に、口述者山本常朝が『葉隠』の中で語る主従関係における個人の問題、滅私奉公の在り方をいくつか取り上げてみたい。

奉公人は一向に主人を大切に歎くまでなり。これ最上の被官なり。御当家御代々名譽の御家中に生れ出で、先祖代々御厚恩の儀を浅からざる事に存じ奉り、身心を擲ち、一向に歎き奉るばかりなり。この上に、智慧・芸能もありて、相応々の御用に立てば猶幸なり。何の御用にもたらず、不調法千万の者も、ひたすらに歎き奉る志さへあれば、御頼み切りの御被官なり。智慧・芸能ばかりを以って御用に立つは下段なり。

(『葉隠』聞書一の三)

この聞書一の三において、山本常朝が考えるところの武士の奉公の基本はほぼ語り尽くされているといえるだろう。

奉公において最も大切なことは、智慧や知識、才能などではなく、ひたすら主人を大切に想うその心根であることが、ここで強調されている。この心根さえあれば、主人にとって頼もしい家来といえるのであり、もちろんその上に知恵や才能があればそれにこしたことはないが、その程度のものであれば、それは一番程度の低い奉公といわねばならないというのである。

では何故、智慧や才能でもって奉公する事が劣った奉公になってしまうのかというと、続く部分はその理由を明快に語っている。

生れつきによりて、即座に智慧の出る人もあり、退いて枕をわりて案じ出す人もあり。この本を極めて見るに、生まれつきの高下はあれども、四誓願に押し当て、私なく案ずる時、不思議の智慧も出づるなり。皆人、物を深く案ずれば、遠き事も案じ出すやうに思へども、私を根にして案じ廻らし、皆邪智の働きて、悪事となる事のみなり。愚人の習ひ、私なくなること成りがたし。さりながら、事に臨んで先づその事を差し置き、胸に四誓願を押し立て、私を除きて工夫いたさば、大はづれあるべからず。

(聞書一の三)

我が智慧一分の智慧ばかりにて万事をなす故、私となり天道に背き、悪事となるなり。

(聞書一の一)

ここでは私心の排除が徹底して語られている。主君に仕えるに当たって、献策においても名案をひねり出そうとする場合、概してそこに私心が入り混りがちなものである。そうなると名案も決して主君のため、お家のためのもではなく、結局のところ自分自身のためということになってしまうだろう。そのような自分のための名案は、公という立場からみた場合には、邪智の働きにすぎず、悪事とならざるをえないことになる。

このことの意味は、主君のため、お家のためという文句を天下万民のためという文句に置き換えてみると、山本常朝の言わんとすることも、そんなに我々の理解を越えたものではないことがわかる。四誓願の中の、大慈悲を起し、人の為になるべき事という条文は、そのことの明白な証拠といえるだろう。

それでは、主君のために何らかの智慧を生み出す必要のあるときはどうすればよいのかというと、——四誓願に押し当て、私なく案づる時、不思議の智慧も出づる——と『葉隠』は語る。この不思議の智慧とは、どのようなものかというと、決して奇抜な名案といった類のものではなく、主君のため、お家のために最低限必要な智慧といった意味であろう。そのような智慧は、頭をひねって沈思黙考によって生み出されるような性質のものではなく、心一つで生まれてくるものであるということも山本常朝は言いたいのである。目安はもう出来ているのである。つまり四誓願がそれである。

一、武士道に於ておくれ取り申すまじき事。

二、主君の御用に立つべき事。

三、親に孝行仕るべき事。

四、大慈悲を起し人の為になるべき事。

この四つの目安を常々念頭に置いて、主君をひたむきに思う志があれば、為すべき事、良い思案は自ら生じて来るものである。あえて良い思案であろうとする必要はないし、名案をひねり出してお役に立とうと考える必要もないのである。もしそう考えるならば、すでにその時、私(心)が入りこんでいるのである。良い思案かどうかを自分自身が意識することは必要なばかりでなく、むしろ邪魔といってもよいものである。何故なら、そのような意識は、それ自体すでに自分自身の智慧・才能を気にかけている私心、自己満足の心が入り混じっているといえるからである。——私を除きて工夫いたさば、大はづれあるべからず。——これで充分である。不思議の智慧とはこのことを語っているであろう。

山崎藏人の、「見え過ぐる奉公人はわろき。」と申されたるが名言なり。忠の不忠の、義の不義の、当介の不当介のと、理非邪正のあたり心付くがいやなり。無理無体に奉公に好き、無二無三に主人を大切に思えば、それにて済むことなり。これはよき被官なり。奉公に好き過し、主人を歎き過してあやまちあることもあるべく候へども、それが本望なり。万事は過ぎたるは悪しきと申し候へども、奉公ばかりは奉公人ならば好き過し、あやまちあるが本望なり。

(聞書一の一九六)

ここでも智慧、才能をもって主君に仕えることの愚かさが語られている。たとえ失敗があったとしても、ただひたすら主人を大切に想う心があれば、それだけで立派な家来といえることができる、と『葉隠』は言い切っ

てしまっている。ここには自分自身、私・が頭をのぞかせる余地は全く存在しないのである。

## 二

次に、家来として主人に対する諫言の場合をみてみよう。

まず考えられることは、武士道を、死ぬこと、身を捨てて死に狂いすること、と規定する『葉隠』であるから、たとえお手討ちになっても、身を捨ててあえて直言・諫言を行なうことこそ臣下の義務であり、そのような武士こそ立派な武士と考えているように思われるが、この点はどのようになっているだろうか。

諫言の道に、我その位にあらずば、その位の人に言はせて、御誤直る様にするが大忠なり。この階の為に諸人と懇意する所なり。我が為にすれば、追従なり。一方は我等荷ひ申す心入れからなり。成程なるものなり。

(聞書一の一二四)

ここで語っていることは、主人に諫言するにしても、それに相応しい地位というものがあろうということ、そして自分がそれに相応しくなければ、それ相応の人に言ってもらうことが大切である、ということである。そのため、上役やそれなりの身分のある人とも親しく交わっていなければならぬのである。それ相応の身分の高い人と親しくなるのはあくまでも諫言のためなのであり、これが自分自身の立身出世のためや虚栄や利害のためであれば、それは追従となってしまうと言っている。

ここでは、身を捨ててもあえて諫言すべきであるとは全く語られていな

い。自分がお家の大事を荷ってみせるという気概は大切なものであるが、だからといってそこに自分自身が顔を出す必要は全くないのである。重要なのは、誰れがするかではなくて、主人でありお家なのであり、天下万民であるはずである。諫言については、具体的な例を一つ引用してみよう。

御縁組の時、何某一分を申し達し候。……申し分は成程聞えたり。さすがなりと云ふ者もあるべし。その身気味よく思うて、云ふべき事を云うて腹切りても本望と思はるべし。よくよく了簡候へ。何の益にもたぬ事なり。斯様の事を曲者などと思ふは以ての外なる取違ひなり。先づ申し出でたる事その詮なく、我身は引き取り、御養育も仕らず、追付御死去なされ候に、御看病も仕らず、残念千万なり。氣過ぎなる人は多分誤る所なり。総じてその位に至らずして諫言するは却つて不忠なり。誠の志ならば、我が存じ寄りたる事を似合ひたる人に潜かに内談して、その人の思ひ寄りにさせて云へば、その事調はるなり。これ忠節なり。……兎角色色心遣ひして、その事さえ調はる様にすれば、我身は大忠節も知れぬ様にして居るものなり。……我こそ曲者と云はるる名聞ばかりにて、我が手柄にする故調はらざるなり。……我身を一向に捨て、主君の上どうなりともよき様にときへ思へば紛るる事はこれなきなり。

(聞書一の四三)

これは、鍋島の姫君が上杉家へ腰入れする際に、この姫君の養育係をしていた武士が、身を捨てての覚悟で強硬に反対したことについて語っているものである。その反対した理由というのは、赤穂浪人の敵討ち事件以来の吉良、上杉に対する世間の不評を考えての忠心からの諫言であったように

ある。結局この縁談は成立し、反対したこの武士は引退せざるをえないことになってしまふ。更に悪いことには、この姫君はその後幾ばくもしないで病気の為亡くなってしまうのであるが、その際には、かつて幼き頃より養育に当たってきた、かの武士はお側で看病することもできなかったのである。これでは、長年の養育係という彼に与えられた武士としてこの勤めを果たせないではないか、というのが山本常朝の言い分なのである。

確かに反対する理由は、武士道に鑑みて、肯けるものである。そして切腹をも覚悟で諫めるとはあっぱれな武士とさえ言えそうである。しかし、意見が通らず、その上自分の本分も果たせないのであれば、何のため、誰のための反対であったのかということになるだろう。

一番いけなかったことは、自分が意見するに相応しい地位にないのに意見をしたことであると『葉隠』は語る。一番大切なことは、ここでは、切腹を覚悟で捨身で意見することではなくて、お家のため、主君のためそしてこの場合は姫君のため、武士道を全うできるよう、事態を良き方向へ導くことそのことではないか。誰がどのような覚悟で意見するかということとは、ここでは問題ではないはずである。

一見身を捨ててお家のためにひたすら奉公しているように見えるが、その実自分自身の覚悟をひけらかす、名誉心といったものが見え隠れに表われているのではないかと『葉隠』はみるのである。——我が身は大忠節も知れぬ様にして居るもの——なのに、あえて切腹覚悟で我が身を表わすのは、全責任を自ら引き受けようとする潔きよい態度のように見えて、実は——我こそ曲者と云わるる名聞ばかりにて、我が手柄にする故調はらざるなり——ということになってしまふのである。

そこで『葉隠』の語る諫言、意見の仕方は実に気の長い回りくどい位に思われる道筋をたどることになる。

聞書一の四三では、諫言するのに相応しい人に相談してみて、その人の意見のようにして言うてもらうこと、もしその人が引き受けなければ別な然るべき人に相談し、と——色色心遣ひして——やってみなければならぬといっている。誰も引き受け手がないときは、自分の力の限界と思つて、一たんは手を引くが、また機会をみて誰かに相談してみるといった風に、何度も何度も根気良く試みる必要があると説いている。そして、徹底的に自分をかえりみず主人のために事が成就するように努力することによつて、おそらく諫言もうまくゆくものであるといふのである。このとき諫言が功を奏して、忠節を尽くすことができた自分自身について他人に知つてもらふ必要もなければ、自己確認する必要もないのである。主君のため、お家のためになればそれでよいのである。重要なのは誰なのか、何なのか、このところを誤まつてしまふ故に失敗する例が極めて多いのである。

主人に諫言をするに色々あるべし。志の諫言は脇に知れぬ様にするなり。御気にさかはぬ様にして御曲を直し申すものなり。

(聞書一の一一一)

これも同じ事情を言ったものである。誠心誠意主人のためにする諫言ならば、決して他人には知られないようにしてあげるものである。主人本人にさえも知られないようにしてはじめて諫言も功を奏するものである。そうでなければ、主人の恥をただ世間に広め、また主人を怒らせてますますいこじにしてしまうことになるだろう。

### 三

以上みてきたように、諫言においても自己自身が、つまり私が表面に出

ることは、動機においても、結果においても徹底的に避けなければならぬといふことが理解される。しかし、このことは、封建制度下の武士の世界の、しかも主従関係における臣下にのみあてはまるのではないかという疑問が残るかも知れない。そこで次に同輩同士の間ではどう考えられているのかをみてみたい。

人に意見をして疵を直すと云ふは大切の事、大慈悲、御奉公の第一にて候。意見の仕様、大いに骨を折ることなり。人の上の善悪を見出すは安き事なり。それを意見するも安き事なり。大かたは、人のすかぬ云ひにくき事を云ふが親切の様に思ひ、それを請けねば力に及ばざる事と云ふなり。何の益にも立たず。人に恥をかかせ、悪口するのと同じ事なり。我が胸はらしに云ふまでなり。……

(聞書一の一四)

ここでも同様のことが語られている。言にくいことを、恨みをかうことも恐れず、あえて言うといった忠告の仕方は、一見立派な事に思えるが、決して正しい仕方とはいえないというのである。一番重要なことは、相手の悪しき癖などを直すということであるから、それには直るようになる仕方といったものがあるはずで、相手が受け入れにくいものであれば、それは全く意味のないものといわねばならない。当人にとって耳の痛い直言というものが、決して受け入れ易いものではないことは、我々自身もしばしば経験するところである。それをあえて直言するということの裏にひそんでいるものは、いったい何であるかと考えると、結局——我が胸はらし——にすぎないのではないだろうか。自分の胸のつかえがとれて、それに一種の満足を感じている自己自身がそこに見い出されないであろうか。

つまり、ここにも私が顔をのぞかせているのである。真険に、心から相手のために思いやるのであれば、自分自身は全く問題の外にいるはずで、自分がどうあるか、どう相手に受けとられるか、などといった点は全く考える必要のないものである。

そこで、相手に意見を受け入れてもらってその人の悪しき点を改めてもらうために細々と心を配らねばならないのだが、その仕方を具体的に『葉隠』は述べているが、これも先の主人への諫言と同様のものである。引用は省略するが、一つ言えることは、武士道を死ぬこと、死狂いと説いていることは相反するかのように、氣長に手をかえ品をかえ、細心の心配りをもって友人への忠告に心を砕くべきことが説かれている。

こうしてみると、主君に対する諫言も友人に対する忠告も共に同じ仕方であることがわかる。そして、厳しく戒められていることは、どちらの場合も自己自身が表面に表われることである。つまり、他者のために徹頭徹尾貫くこと、即ち全き自己否定が要求されているのである。

#### 四

最後に、諫言・忠告に限らず、武士の心構えを述べている言葉として、『忍恋』を挙げる事ができるだろう。

恋の部りの至極は忍恋なり。「恋ひ死なん後の煙にそれと知れ終にもらさぬ中の思ひは。」かくの如きなり。命の内にそれと知らずは深き恋にあらず、思ひ死の長けの高き事限りなし。たとへ、向より、「斯様にてはなきか。」と問はれても、「全く思ひもよらず。」と云ひて、唯思ひ死に極むるが至極なり。……主従の間など、この心に済むなり。……

(聞書二の三三)

ここでは念友に対する根本の心の持ち方を語っているのであるが、忍恋こそ最高のものであるといっている。徹底的に一方通行の相手への想い入れこそ最も程度の高い、純粋な心といえるというのが山本常朝の考えである。そして、主従関係についても同様の心根が必要であることを強調してやまない。

奉公人は、心入れ一つにてすむことなり。……分別もなく、無芸無男にて、何の御用にも立たず、田舎の果にて一生朽ち果つる者か、……御懇ろにあらうとも、御情けなくあらうとも、御存知なきまゝいも、それには曾て構はず、常住御恩の忝なき事を骨髓に徹し、涙を流して大切に存じ奉るまでなり。……忍恋などこそよき手本なれ。一生言ひ出す事もなく、思ひ死する心入れは深き事なり。……

(聞書二の六一)

この部分は先に引用した部分とは反対の順序の記述となっているが、その事はとりも直さず主従の間と友人の間の心根には、比重の違いはないことを物語っているといえよう。いずれも極端なまでの自己否定を説くものであり、これこそ最高の美德であるというのである。

ここには、現代人からみれば、確かに奇異の感を覚えざるをえないものが存在しているが、全く自己を否定する利他に徹した精神それ自体は、果たして無意味なものとして否定されるべきものなのであろうか。ややもすれば利己主義におち入りがちの、個人主義が当然とされる現代だからこそ、忍恋の心根が奇異に映るのではないのだろうか。

このような、一方的な献身の仕方こそ、我々が失ないつつある何ものかを語ってはいないだろうか。この問題は本稿の主旨からはずれるので、別な機会に取り上げることとして、結局、『葉隠』武士道は、諫言・忠告・忍恋を例にとっても、完全な自己否定、つまり個人意識の否定によって貫ぬかれていると結論してさしつかえないであろう。

### おわりに

それでは、『葉隠』では個人意識について、個の主張について、一切問題となっていないのであろうかというところ、私は、『葉隠』は独特の仕方であり、決して消えることのない個の主張をしていると考える。

詳論は別稿に譲らざるをえないが、「武士道とは死ぬことと見付けたり。」というこの規定自体が、実は、封建制度の真ただ中でなしえた強烈な自己主張に他ならないと私には思われるのである。つまり、死という形で武士は唯一、自己の個としての存在を主張し得たということである。

死は武士にとってのみならず、何人にとっても個人の死という形で行ってくる。いかなる人間といえども、他人の死そのものを死んでやることは不可能である。死こそはまさに自分一人だけのものなのである。この唯一自分だけのものである死を、自らの覚悟の上で荷うということ、ここに否定的な形をとりながら強烈な自己主張の表われを見ることができるといえる。

武士にとっては、死は意識しないとき、外からふりかかってくるのではなく、自ら自己の死を意識しながら、しかも自分の手でそれを迎えないといけないものなのである。切腹という、外国人から見れば野蛮極まりないものに映ったであろう死の儀式も、その意味で武士にとっては極めて深い意味を荷った死に方であったといえるだろう。

しかし、死は予期しないとき突然訪れることもある、という点では武士

も例外ではない。もし、突然外から死が知らぬ間にやってきたならば、武士は自己の死を自ら自覚的に荷えないながら死んでゆくことはできないことになってしまふ。そうになると、武士の個としての自己主張の場はどこにもないことになってしまふ。そこで、そうならないために、死の覚悟が説かれることになるのである。常日頃死んでおくことの重要性の一つを、ここに認めることができるであろう。そして、逆にまた常住死身になっていたという証は、現実の死の時に臨んでうろたえることなく立派に死に切ることによって示されうることになる。

生きている間常に死を覚悟しておくことを、『葉隠』が繰り返し説く意味の一つはここにあると私は考えるのである。死の覚悟は、来るべき死に対して取り乱すことのないよう心の準備をしておくという意味をもつだけでなく、日常の死の覚悟それ自体が、前述のように固有の意味を有するのである。死の覚悟をすることと実際に立派に死ぬこととは、武士においては一つのことなのである。

最後に、死を自身で引き受けるといふかたちで自己の個としての存在を主張したのだといっても、死が個の全否定であることにはかわりはない。その意味で、個の主張を否定的な仕方ではかなしえなかったのが武士であったといえるだろう。『葉隠』武士道は、このことをはっきりと物語っているように思われる。

注 『葉隠』からの引用は、和辻哲郎・古川哲史校訂による、岩波文庫版『葉隠』によるものである。